

やさしい日本語で読む日本文学

レベル 初中級

# トロツコ



【原作】 芥川龍之介  
げんさく あくたがわりゅうのすけ

【簡約】 浅野まほ・中村清乃  
かんやく あさの なかむらさやの

【挿絵】 中村清乃  
さしえ なかむらさやの

りょうへい にじゅうろくさいのとき つま こ  
良平は二十六歳の時、妻と子どもと

いっしょ どうきょう す はじ いま ほん  
一緒に東京に住み始めた。今は、本の

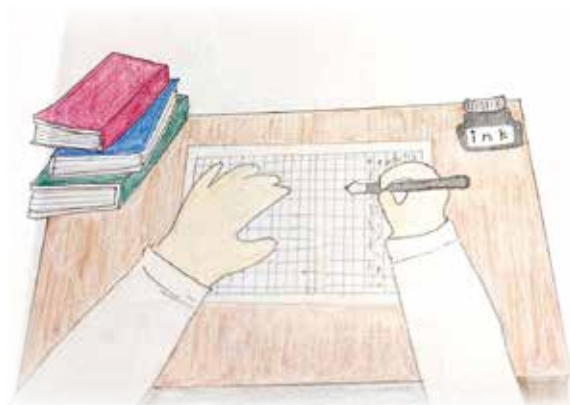
かいしゃ はたら りょうへい とくぎ ほん  
会社で働いている。良平は時々、

こ ひどり かえ ひ  
子どものころに一人で帰った日のことを

おも だ おも だ とくぎ  
思い出す。思い出す時はいつも、

たいへん しごと つか とくぎ  
大変な仕事に疲れた時だ。

そと くら とくぎ みち おも だ  
外が暗い時に走ったあの道を思い出す…



もう昔の話である。良平が八歳の時のことだ。小田原と熱海の間に、小さな鉄道を作る工事が始まった。良平は毎日、その工事現場を見に行った。トロッコで土を運ぶのが、おもしろかったからである。

土を積んだトロッコには、作業員の男が二人乗っている。トロッコは、山を下り、平らなところに着くと、止まる。そうすると、男たちはトロッコから土を降ろす。

そして、今度は来た道を、トロッコを押して戻る。良平はそれを見ながら

— ぼくもトロッコに乗りたい。乗れなくても、トロッコを押したい—

と想うのだった。

二月のある夕方にがつ ゆうがたのことである。良平は弟と、友達と、トロッコが置いてある工事りょうへい おとうと ともだち かいじ

現場げんばに行った。トロッコはあったが、どこを見ても作業員はいなかった。三人は、

トロッコを静かに押した。そして、静かに線路を登った。

少しすると、トロッコは動かなくなった。良平は、二人に言った。

「もう押さなくてもいい。さあ、乗ろう！」

三人はトロッコに乗った。トロッコが線路を走る。景色がどんどん変わる。

良平はとても気分が良くなった。



しばらくすると、トロツコは出発した場所へ戻った。

「さあ、もういちど押そう。」

三人は、またトロツコを押そうとした。その時、うしろから大きな声がした。

「こら！ だれにトロツコをさわっていいと言われた!？」

見ると、男がこわい顔をして立っていた。三人は急いで逃げた。(良平は、

大人になった今でも、この男の姿を思い出すことがある…。)



ある日のことである。良平は一人で、工事現場にトロッコが来るのを見ていた。

トロッコを押しているのは、二人の男だった。

—この人たちなら怒らないかもしれない—

良平はそう思いながら、トロッコの近くに走って行った。

「ぼくも押そうか？」

一人が、トロッコを押したまま返事をした。

「おお、押してくれ」

良平は喜んで、トロッコを押した。



「お前はなかなか力があるな」

もう一人も、そう言っいてほめてくれた。

そのうち、道がだんだん平らたいになった。良平は心配しんぱいになった。

—押おさなくていいと言いわれたらどうしよう。もっと押おしたい—

良平は、男おとこたちに聞きいた。

「まだ押おしていい？」

「いいよ」

二人ふたりの男おとこは答こたえた。

線路は、また上り坂になった。

—上り坂のほうがいい。押させ

てくれるから—

良平は、そんなことを考えな

がらトロツコを押した。

しばらくすると、坂は下りにな

った。男は、良平に言った。

「さあ、乗れ」



良平は、トロツコに乗った。トロツコは、三人が乗ると線路を走った。

— 押すよりも、乗るほうがいい —

良平は思った。

竹がたくさんあるところに来ると、トロツコは止まった。三人は、またトロツコ

を押した。落ち葉がたくさんある坂を、上った。今度は、海が見えた。良平は

— 遠くに来すぎてしまった —

と思った。

三人は、またトロッコに乗った。トロッコは走った。けれども、良平はおもしろい気持ちではなかった。

—もう帰ろう—

良平はそう思った。しかし、最後まで行かないと帰れないことは、良平にもわかっていた。

その次に、トロッコが止まったのは、茶店の前だった。二人の作業員はその店に入った。そして、ゆっくりお茶を飲み始めた。良平はすこしいらいらした。

しばらくして、二人は店から出てきた。良平に、新聞紙に包んだお菓子をくれた。

良平は

「ありがとう」

と少し冷たく言ったが、男たちに申し訳ないと思つて、お菓子を食べた。

お菓子は、新聞紙の石油のにおいがした。

三人は、トロツコを押しながら坂を登つた。良平は

― 帰りたい―

と思つた。

坂を押し終わると、また茶店があつた。作業員たちは店に入った。

しかし、良平は、帰ることだけを考えていた。

夕日が見える。

—もう日が暮れる—

良平はそう思っ、落ち着かなくなった。

一人で、トロツコの車輪をけったり、押してみたり  
した。

店から出てきた作業員たちは

「もう帰りなさい。おれたちは帰らないんだ」



「かえ帰りが遅くなると、いえ家の人ひとがしんぱい心配するよ」

と言いった。

りょうへい良平は、

—とおこんなに遠くきに来たのに、ひとり一人でかえ帰らなければならないのか—

と、きゆう急にな泣きたいきもち気持ちなになった。

しかし、な泣いてもおもしかたないともおも思った。

りょうへい良平は、おとこ男たちにおいじぎをかえすると、いえ家にはし帰るためにだ走り出した。

そと外はくら暗い。りょうへい良平ははし転んでもはし走った。

やっと遠くに工事現場が見えるところまで帰ってきた。

良平は人を思っ  
て泣きたく

なった。しかし、それでも泣かないで、走り続けた。

村へ入ると、家に電気がついていた。村の人は良平

を見て、

「どうしたの？」

と聞いた。しかし、良平は、答えないで家まで走  
た。





— やつと家いえに着ついた —

良平りょうへいは大きな声おおこえで泣ないた。とても大きな泣き声おおきななきこえだったので、近くちかの家の人も集あつまってきた。両親りょうしんや、集あつまってきた人ひとたちは良平りょうへいに泣ないている理由りゆうを聞きいてきた。

しかし、良平りょうへいは泣なくことしかできなかつた…。



やさしい日本語で読む日本文学  
『トロッコ』

2022年3月1日発行  
発行 宮城学院女子大学 学芸学部 日本文学科  
印刷 株式会社 フロット

許可なしに転載・複製することを禁じます。